
とある無能の集積強撃《heap break》

wing

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある無能の集積強撃《heap break》

【Nコード】

N6040Y

【作者名】

Wing

【あらすじ】

少年、瀬野宗也^{せのすけ}は普通に生きていた普通の少年であったが、ある時神様のミスによって命を落としてしまう。

せめてものお詫びに、と神様に転生させてもらい、大喜びした宗也であったがそこはなんと『とある魔術の禁書目録』の世界だった！！さて、宗也は死亡フラグびんびんなこの世界でどのような物語を繰り広げるのか—————

科学と魔術が交差し、そしてそこへ瀬野宗也が加わる時、物語は大きく動き出す！！

プロローグといふ名の転生。 (前書き)

つい、書いてしまった。

ブローグという名の転生。

目を開けると、そこは真っ白な何もない空間だった。

そして、眼の前では気の強そうな女の人が仁王立ちしている。

さて、これはどういうことなのだろうか？

・・・すまん。省略しすぎた。

とりあえずこうなったいきさつを話そう。

えっと、100円玉が財布から落ちて転がって行ったので、取りに行ったら電柱に激突しました。

その後の意識は皆無ーーーーー

・・・笑えよ。

まあ、いいんだ。

意識の失う前の俺の行動なんて、1日前、家の前を歩いていたアリの数くらいどうでもいいんだ。

問題は、今。

先ほども言ったが、俺の目の前には女の人がいらっしゃる。

まあ、二次小説的に言えば神様で、転生とかだね。

それだとどんなにありがたいか・・・

と、一人考えていると、女の人から声が上がった。

「・・・すまん。」

え？

まさか本当に・・・俺、死んだのか？

「私のミスでお前を殺した。反省はしているが後悔はしていない。」

「それが間違えた神の態度かあああ！！！！」

うむ、ついつい突っ込んでしまった。

だってさ、何その態度。

間違えたならもっと申し訳なさそうな態度をとれよ！！って話。

「ほお、よく私が神だとわかったな？」

「あれそこに目をつけるの・・・」

逆切れとかすんのかな・・・って思ったんだが。

あ、言い忘れてたけどこの人の容姿、

まんまISの千冬さんっす、はい。

だからIS好きな俺は内心テンションMAXだぜヒヤッハアア！！

・・・ん？そういえばこの人どんなミスで俺を殺したんだ？

「ああ、それは私が大好きなエクレアを食べているときに中のクリームを落としてしまっただけだ。それだけだ。」

「俺はクリームに殺されたんだな！？」

くそ……。一生の不覚。

まあもう死んでるが。

「とりあえず殺してしまったのは確かだ。元の世界に戻ることはできん。よってお前を転生させる。ぶっちゃけ私はどうでもいいが。」

きたっ！！

どんな世界に行けるんだ！？

やっぱり容姿からして『IS』かな！？

「お前には『とある魔術の禁書目録』の世界に転生させてもらっつ。」

「容姿関係なかった！！」

まあ、それはそれで嬉しいが。

神様はそれだけ言うところ言っただ。

「それじゃあ、さよなら。」

「・・・あれ？なんか死なないように能力をつける、とかないんですか？」

「ん？ああ！そうだったな！」

忘れてたんかい・・・

「なんか能力の希望はあるか？」

うん・・・

ここはやっぱり強い奴を選んだほうがいいよな？

あそこ死亡フラグくそおいし。

「じゃあとりあえずドラゴンボールの孫悟空の身体能力と、めだかボックスの「却下だ。」はやっ！！まだ全然言っていないのに！！」

俺が長々と能力の説明をしようとしたが、神様に遮られた。ちくせ

う。

「めんどつくさいから君の能力は適当に決めておく。それじゃあ。」

そう言って神様は手を横へ振る。

ここで俺はほかの二次小説の事を思い出す。

(たしか床とかが開くはずっ・・・!)

だが、何秒たつても一向に変わらない。

「・・・えっと、これってどうやって転生するんすか?」

「安心しろ。」

そう言っつと神様は不敵な笑みをうかべる。

「君の思った通りだ。」

「えっ!!」

そう神様が言うとパカツときれいに床が二つに割れた。

当然、足場のない場合は、落ちるのみ。

「うおおおお!! やっぱりかよおお!!」

「それじゃあ、がんばれ。そこそこ強い能力つけてやるから、安心して転生しろ。」

それを最後に俺の意識は途絶えた。

目を開けると、知らない天井だった。（あれデジャブ？）

「ここはどこだ・・・っと、俺転生したんだっけ。」

鏡を確認――元の容姿のまま。

とりあえず傍にあったバックを確認。

中には生徒手帳と制服、そのたもろもろが入っていた。

・・・見る限り俺当麻と同じ高校だね。

やったね！これで原作介入がしやすいよ！！

「あつ！そういえば神様は何の能力をつけてくれたんだろうか・・・

」

俺は神様の一言を思い出し、早速能力を確認。

ん？ただ目を閉じて考えただけ。

そうすると頭の中に能力が浮かんできた。

『不死』

『力を溜める程度の能力』

・・・神様、これ超能力ちゃう。

こうして瀬野宗也せのすけやの物語が始まった。

ブローグという名の転生。(後書き)

12月4日 少し編集。

主人公設定。（前書き）

主人公設定です。

主人公設定。

名前

瀬野宗也
せのむねや

身長・体重

170cm
70kg

容姿

髪は色も髪型もBLEACHに出てくる黒崎一護。

目は少しつりあがっている。

口を歪めると結構悪役っぽく見える……らしい。

まあ、世間一般でいえば、ややイケメン。

性格

意外と話しやすい性格。

友達には優しいが、自分が敵と判断したものには容赦なく攻撃をしかける。

怒りの沸点は高く、よっぱどことがないほどキレない。（自称なので、真実はわからん）

料理はそこらへんの人とは比較にならないほどうまい。だが、無類の辛いものの好きであり、普通にラーメンなどを食べるときはトウガラシを少々ではないほどいれる。

ちなみに、とあるで好きなキャラは神裂さんらしい。

趣味

当麻いじり。

本人いわく反応がすごくおもしろいらしい。

能力

アンデット
『不死』

どんな事をされても死なない、死ねない。

たとえ身体を吹き飛ばされようが燃やされようが、どんなになっても再生する。

回復するのは身体が危険と判断したときのみで、普通の攻撃を受けたくらいでは回復しない。

ただし、『不老』は入っていないため、普通に歳はとる。

『力を溜める程度の能力』

名の通り、身体のある所に力を溜めることができる。

溜めている箇所は10秒ごとに耐久力や破壊力が上がっていく。

溜めを解放せずに攻撃することも可能なので、戦いを長引かせていると、ほぼ詰む。

溜められる量に制限が無いため、時には地球を破壊しかねないほどの威力をもたらすこともある。

同時に溜められる箇所は、一か所のみ。

うん、東方。

主人公設定。（後書き）

とりあえず、こんなものです。

次の投稿は、土曜日の予定です。

12月4日 少し編集。

それでは、また次回。

第一話 『初日から波乱万丈。』

「・・・不幸だ。」

つめたゝいやらあつたかゝいやら書いてある自動販売機の前で、男は言った。

その表情は、人生の辛さを痛感した。そんな表情である。

その男の近くには、その男とは打って変わって笑顔を浮かべ立っている男がいる。

「まあ、いつもどおりだな。今日も平和だ。」

「俺の不幸を日常にしてんじゃねーよ！・・・くそ、唯一の札だったのに・・・」

立っている男がニヤリと笑みを強めながら言つと、男はさらにへこみ、ついには地面に手をつき項垂れた。

いわゆる、orz状態。

そんな男を笑いながら見ているのは、今日転生したばかりの男、瀬野宗也。

そして、地面で頂垂れているこの男は、『イマジンプレイヤー幻想殺し』を持っており、「とある魔術の禁書目録」の主人公、上条当麻。

この二人がこういう状況になったわけは、朝、宗也が転生した頃まで遡らないとわからない。

それでは、遡ろう。

とある無能の集積強撃《h e a p b r e a k》

第一話 『初日から波乱万丈。』

時は遡り、転生した直後。

「はぁ・・・超能力使えるぜひゃっほお！と思ったらまさかの東方かよ・・・マジテンション下がるぜ・・・」

だが、不死をくれたのはグッジョブ！これで超能力使えたら言うことなしなんだけど・・・と宗也は付け加える。

「まあ、いつまでも凹んでも仕方ないか。さてと、今はい・・・ん？」

開き直り、ポケットに手を入れて携帯で時間を確認しようとした宗也に、バッグの底にあるメモが目に入る。

「なんだこれ？」

一旦携帯を取り出すのをやめ、メモに手を伸ばす。

開けてみると、最後に大きな字で『とある神より』と書いてあるの

が見えた。

「神様からか、何が書いてある事やら……」

「さて、貴様がこれを確認しているということは、すでに転生が終わった、ということだろう。」

「どうだ？私が上げた素晴らしい能力は？」

「もうちょっとかつこいいのが良かったよ！それにこれ東方だし！」

手紙だと言っのに、宗也は必死に自分の意見を言う。

「まあそう言うな。それでも結構チートなレベルなのだぞ？問答無

用の力で相手をねじ伏せる。

貴様にぴったりの能力ではないか？まあ、これを完璧に使いこなすには、身体を鍛えることが大事だな。

さて、本題に移ろう。

貴様を飛ばした場所は、学園都市内の学生寮だ。ちなみに部屋は上条当麻の隣だ。

日にちは7月19日。夏休みが始まる一日前。

全員の記憶は操作して、最初から貴様は学校に行き、特に上条当麻と土御門元春とは親友、ということにしておいた。

これで伝えるべき内容は全て伝えた。それでは、よい転生日和を、心から願っている（笑）

とある神様より』

「親切すぎるだろ神様っ！神様マジ神様！！・・・最後の笑が気になるけど。」

前半何をいつているのかわからんが、とりあえず神様サイコーということだろう。

「っと、こんなことをしている場合ではない。今の時間はっと。」

時間を見ると、9：42と表示されていた。

「・・・あつ。」

完全に、どう足掻いても大遅刻である。

「・・・はあ、不幸だ。」

「何を終業式で遅刻したくらいで俺の台詞言ってたよ。宗也は本当の不幸を知らない、そんなことでは序の口だ。」

「何で上から目線なんだゴラア。」

授業を終え、帰り道で宗也はため息をはきながら言うが、それを当麻は何故か得意気に否定する。

「そんなやや少し微妙に不幸な宗也くんに、上条さんが飲み物を奢ってあげよう。」

「あ、俺コーヒーで。」

「じゃあ俺もコーヒーでいいか。」

当麻が自動販売機を指さしながら奢ってやると言ったので、宗也は自分の飲みたいものを言う。

当麻は自動販売機に近づき、財布を出す。

取り出したのは、二千円札。

それを当麻はふんふーんと鼻歌を歌いながら上機嫌で投入口に入れる。

あっ！と宗也が声を上げたがもう遅く。

「コーヒーと書いてあるボタンを押しても、自動販売機が反応することとはなかった。」

一度当麻は呆然とし、それから再びボタンを押す。

当然と言ってよいのかわからないが、反応しなかった。

そして、冒頭に至る。

「・・・これが本当の不幸か、確かに。勉強させていただきました当麻さん。」

「・・・ああ、そうだ・・・」

宗也は項垂れている当麻の肩に手を置き、少しだけ慰めた。

「元気だせつて、そんな事誰にだってある。」

「くそ！なんであそこの自動販売機は事あるごとに人の金を喰っていくんだ！」

「始めてじゃねーのかよ！いい加減一回喰われたらあきらめろや！」

あれからとりあえず、哀れな当麻を慰めてやるつ、と宗也は当麻を

ファミレスに誘い、今はファミレスを目指して移動している途中だ。

「あ、奢らねーから。」

「お前には慈悲の事はないんですか!？」

そして当麻は再びうがーっ!と声を上げる。

そんな当麻を見て宗也は意地のわるい笑みをうかべる。

「ほら、そうこうしている間についたぜ。やけ食いしよう。あ、奢らねーから。」

「知ってるよ!一回も言うんじゃない!」

と、話している間にファミレスについたのでとりあえず二人は店内に入る。

「さて、何処に座ろうか。」

「ああ、……ん?」

「どうしたとつま……ってああ。」

当麻が急に視線を止めたので、宗也は不信に思い当麻と同じ方向を見る。

そこでは、茶色い髪をした女の子が、不良にナンパされていた。

あ、こいつ美琴じゃねえか、と宗也は心の中で思う。

御坂美琴。

常盤台中学の2年生で、学園都市第3位のレベル5の能力者である。

その女の子が、不良にナンパされているのだ。

「どうする当麻。助けるのk・・・って聞くまでもねえか。」

「ああ。助けるに決まってる。止めんなよ。・・・不良どもをな。」

「ん？すまん、最後聞こえなかったからもう一度いつてくれ。」

最後の当麻の一言が聞こえず、宗也は当麻にP a r d o n ? と言っ

た。だが当麻はそんな宗也を無視し、勇敢？にも不良へと近づいて行った。

当麻は不良の目の前に来た後咳払いを一回し、男に言った。

「ちょっと君。彼女困っているじゃありませんか。・・・」

当麻はそこで言葉に詰まった、いや言えなかった、の方が正しいであろつ。

なぜなら、男の後ろからぞくぞくと、不良の仲間らしき男がでてきたからである。

そして、仲間を止めようとしている当麻に「なんだてめえ。」やら「やんのかコラァ!」やらなんやら言ってくる。

当然、そこから先はわかりきっている。

「不幸だ。」

当麻は深いため息と同時に呟いた。

夜の街中、男二人は必死に走っていた。

「はあ、はあ、はあ、」

「くっそ、なんつでおれも一緒に逃げなっきゃなんなんだよぉ！」

不良から逃げながら、宗也は当麻に不満を言いつける。

「ばっかやろうっ、不幸は分け合わなきゃっなあ！」

「いらねえよそんなのっ！！」

不幸なんて誰が欲しいやついんだよ、と宗也は付け加える。

そう他愛もない会話を繰り返してる時、不意に宗也は止まった。

「何やってんだよ宗也っ！」

「もう追っきてないみてえだぜ、ほら。」

確かに前を見ると、不良達の姿は一人も見当たらなかった。

代わりに、先ほどナンパされていた美琴が、こちらへ歩いてきていた。

「どうやら、追ってこなかったのはあんたのおかげらしいな。」

「うん、めんどいから全員私が蹴散らしちゃった。」

そう言って美琴は髪をいじる。

その手から、にわかに電流がながれているのが見えた。

「これは感謝するべきなのかしないべきなのか、どっちなんだ？」

「俺らは何も頼んでねえし、感謝しないでいいんじゃないか？」

宗也の態度に、美琴は一瞬顔をしかめたが、すぐに元の顔に戻した。

「・・・ねえ、超電磁砲^{レールガン}って知ってる？」

美琴はコインを取り出し、笑みを浮かべながら二人に問う。

美琴の浮かべている笑みは、あきらかに意地の悪い笑みであった。

嫌な予感、と宗也の第六感が危険を告げる。

「フレミングの運動量を借りて、砲弾を打ち出したりする物なんだから――――」

そして、美琴はコインを上へ弾く。

「こういう物をいうらしいのよねっ――！」

瞬間、美琴の指先から電撃が放たれ、轟音とともに二人の横をコインが遠ざかって行った。

遠ざかった後の地面には、くっきりと線が刻まれていた。

二人はくつきりと刻まれた線を見て、冷や汗を流す。

やっべー、と宗也は心の中で思った。

（これが超電磁砲^{レベルガン}か。直撃してたら綺麗な穴が開くんじゃねえか？）

顔面に穴が開いた自分の姿を想像し、宗也は身震いする。

「・・・まさか、連中を追い払うのにそいつを使っただのか？」

「馬鹿にしないでよ。私だってたががレベル0にコレを使ったりなんてしないわよ。」

「『たがが』だってよ。なんか人を見下しているように聞こえるんだが・・・」

そう宗也が言うと、逆鱗に触れたのか、みるみるうちに美琴の表情が変わっていく。

もちろん、怒りの方向へ。

「・・・全く・・・強者の台詞よね、『それ』」

そして、美琴の身体から出ている電気がバチバチツと音をたてる。

「おいっ！俺レベル0なんだけどっ！」

「俺、じゃなくて俺等、だがな。」

「うそっ！マジで！？じゃあこの場を誰が止めるっていうんだ！！」

「言ってなかったっけ？あ、それと止めんのお前。」

と二人で話している間に、美琴から「問答無用！」の声とともに、電撃が発せられた。

「んじゃあ、頼むわ。」

宗也は素早く当麻の後ろに避難する。

「おいっ！・・・くそお！！！」

発せられた電撃を、当麻は右手でガードする。

当然、右手には『イマジンブレイカー幻想殺し』が宿っている為、電撃は軽々と右手に無効化されていた。

美琴は自分の電撃がまるで無効化されるのがわかっていたみたいに、表情を変えなかった。

「で、その『レベル0』のアンタが、どうして『レベル5』の攻撃を受けて、無傷で立っているのかしら？」

「・・・お前なんていうか、不幸っつーか、ついてねーよな・・・」

そして、当麻は獰猛な笑みを浮かべて、こう言った。

「お前、本当についてねーよ。」

そんな当麻の態度に腹を立てたのか、美琴の身体から先ほどより強い電気が発せられる。

「~~~~~!」

「おい、お前落ちつけ。お前もだ当麻。一つ忘れているぞ、こんな所でどでかい雷撃が発せられたら、俺等の電化製品はどうなると思う?」

「・・・あつ。」

そして数秒後、俺等の頭上から一つの雷が落ちた。

「・・・暑い。」

翌日。

蒸しかえるような熱気で、俺はいつもよりも早く目覚めた。

来ていたＴシャツは汗でびしょびしょになっている。

真夏にクーラー無しはきつい、と俺は痛感した。

「ちつくしょお当麻の奴め・・・お前が挑発的な態度をとらなければこんなことにはならなかったんだ・・・」

誰もいない自室で、俺は愚痴る。

「くそ、こうなったら嫌がらせに当麻の部屋をもっと暑くしてやる・
・覚悟しろよ当麻。」

そして俺は着ていたべしよべしよのＴシャツを脱ぎ、新しい服に着替える。

ジーンズを履き全ての準備を済ませたあと、加湿器を持ち、部屋を出た。

当然、この加湿器は、嫌がらせの為の小道具です。ていうか主役。

そして、隣にある当麻の部屋へ、ノックをせずに入った。

この時、ノックをしていれば、と後の俺は深く後悔した。

そこには、全裸で仁王立ちしている少女と、それを驚きながらもみ
ている当麻の姿があった。

「……………え？」

俺、当麻、そしてインデックスの視線が、交差した。

第一話 『初日から波乱万丈。』（後書き）

12月16日、細かい部分の修正&追記。

第二話 『白いシスターさん、（当麻の所に）襲来』

幼女。

若い女性の事を指す言葉であり、だいたい小学生あたりの女性までを指す。

そんな幼女と、親友が一緒に向かい合っていて、しかも幼女の方が全裸だったら、君はどんな反応をする？

「・・・失礼しました。」

俺は静かに言うべきことだけを言って、扉を閉めた。

とある無能の集積強撃《h e a p b r e a k》

第二話 『白いシスターさん、（当麻の所に）襲来』

（１０分後（当麻が誤解を解こうと奮闘した時間））

「なるほど、事情はわかった。」

「・・・はあ、補習前に何でこんな疲れなきやなんなんだ・・・」

当麻がまるで一仕事終えた見たいに腕で汗を拭う。

「とりあえず、状況を整理しようと思う。よろしいかな？」

「ああ。」

「・・・っ」

ちなみに、当の幼女・・・失礼した、白いシスターさん、『インデックス禁書目録』は同時に二人の男に裸体を見られた為か、当麻うちのベッドの上で毛布にくるまり、蹲っている。

少しだけ、罪悪感はあったりする。

「まず、朝起きて布団を干そうとしたら、ベランダに幼女g「禁書
ツクス
目録!」・・・失礼。禁書目録が既に干されていたと。既に突っ
込みどころ満載だが、ここで突っ込むと話が進まないのでスルーする。
」

幼女、と言おうとすると、禁書目録から怒声交じりの声がかかった
ので、とりあえず訂正する。

「そして、腹が減っているとされたので、適当に料理を作り、振
舞う。まあここまでは普通だな。そして次。彼女の来ている服が『
歩く教会』というなんかまあ丈夫でしかも異能の力の加護つきのや
つなので、とりあえず彼女の全裸が見たいから右手で破壊した、と
いうわけだな。

・・・お前は鬼か。」

「ちげえよ!!」

適当に盛って話すと、当麻が必死に否定した。

一方の禁書目録は、ぶんぶんぶん、と首を縦に頷かせている。
インデックス

「まあ、冗談はこれくらいにすつか。・・・次が本題だ。」

俺が真剣に切りだしたので、当麻も真剣な表情に変わる。

「問題は、この少女・・・インデックス禁書目録をこれからどうするのか、という話だ。飼うにしても、こいつは何を食べるんだ？ドッグフードか？」

「こいつはアホか。」

「うん、言動からして生粋のアホかも。」

くそ、二人にアホって言われた。特に禁書目録インデックスにアホと言われたのはきつい。

ちなみに、当麻から魔術の話は聞いていない、・・・俺を巻き込またくないんだろうな。

「おっと、こんなことをしている場合ではなかった。当麻、お前補習は？」

「っ！やっべえ忘れてた！！」

完全に忘れてたようで、当麻は慌てて支度を始める。

「あのさ、俺これから学校行かなきゃなんねんだけど、お前どうする？宗也と一緒に遊ぶか？」

「何故そこで俺が入る。」

あ、俺の成績はいい（当麻曰くとても成績いい）ので、補習は受けなくていいらしい。」

グッジョブ神様。

「いい、出てく。いつまでも此処に居ると、連中ここまで追ってきた。そうだし。君だって、こここの部屋ごと爆破されたくないでしょ？」

「おっ、おい！待てよ！」

そこまで言つと、禁書目録・・・ああめんどいからインデックスで。

インデックスはさつさと玄関の方へ向けて走り出した。

「待てったら！」

当麻がインデックスの後ろを追いかけるが、その時、何もない場所で躓き、手に持っていた携帯を落とし、よろけてその落ちた携帯を踏んだ。

「・・・不幸だ。」

「今日も平和だな。」

「君の右手、空気に触れてるだけで、幸運とか神の御加護とか、そういうのもまとめて消してしまっているから、不幸だと思うよ。」

「つまり、どういこと？」

俺がそう言つと、インデックスはニコリと笑つて、

「つまり、その右手が存在している限り、君の不幸は止まらないし、どんどん不幸になっていくってことだよ。」

「がぁは！」

インデックスの言葉を聴いて、当麻はショックを受けたのか、地に沈む。

「つまり、当麻がその右手を持って生まれてきたことが、不幸なんだな。なるほど勉強になった。」

「っ！・・・そんなことより！お前、ここを出て行くあてとかある

のかよ？」

「ここに居ると、敵が来ちゃうから。」

魔術師、ねえ。

あ、俺まだ魔術の事知らないことになってるんだっけ？

じゃあここはわからないふりしなくちゃっと。

「敵？なんだそれ。お前誰かに追われてんのか？」

「ちよつと宗也はあっち行っててくれないか？ここからの話はお前にはわからない。」

・・・当麻の優しさが身にしみるぜ。

しゃあない、ここは優しさにのっかってあげますか。

「・・・わーったよ。俺を抜きで内緒話なら、好きにやっってくださいいな。」

「じめんな。」

気にすんな、と俺はつけて、俺はインデックスの隣を抜け、外へ出た。

「じゃあな、補習がんばれよ当麻。」

おう、という当麻の声を聴いて、俺はその場を後にした。

「暇だ。」

あの後、暇つぶしに色々な所を見て回り、昼食を食べ、再びぶらぶらした。

現在時刻、4時。

原作介入しようにも、気配をたどれん。

「まあ、そろそろ家へ帰りますか。そうすれば、自動的に原作介入だ。」

と、家への帰路を急ごうとした俺に、一つの光景が目に入った。

「あれは……インデックスか？」

屋根の上で、修道服を着た女の子が、男と女に追いまわされている。

「と、なると、必然的にあれは、神裂とステイルか。」

そして、たった今、インデックスが神裂に切られた。

背中から、鮮血が飛び散る。

だが、そんな状況でも、インデックスは逃げて行った。

切った神裂と、ステイルは呆然としている。

そしてその間に、インデックスの姿は見えなくなった。

「・・・これはいいチャンスかもな。」

初めての戦闘が神裂とは、俺死ぬね。と付け加える。

だが、俺は死ねない。

つまり、俺にははなっから負けることは入っていない。

あとは、どうやって勝か。

「さて、俺の修行の相手になってもらいまっせ。神裂さんよお。」

そして俺は、両足に力を溜めながら、二人がいる方向へ駆けだした。

魔術師――『神裂火織』は、その場で呆然としていた。

インデックスに逃げられた、からではない。

それは、

「・・・何故、彼女に刃が通ったのでしょうか・・・」

そう、鉄壁、いや無敵の防御を誇る、と言ってもよい『歩く教会』を纏うインデックスに、いとも簡単に火織の刃が通ったのだ。

「一体何故・・・」

そこへ唐突に、ある男が現れる。

「どうした？刃が通るはずのねえインデックスを切ったから、呆然としてんのか？・・・魔術師さんよお。」

不気味な笑みを浮かべながら、宗也は火織の前へ姿を現した。

「・・・何者ですか貴方。私たちの正体をしっているとは・・・魔術師ではないようですし・・・」

「誰、じゃなく何者、ときたもんだ。なかなかするどいね火織さんよお。」

「っ！！」

自分の名前までも知られている、と火織は一気に半歩下がり、警戒態勢に入った。

「貴方・・・本当に何者ですか、どこまで知って・・・」

「初対面の相手に質問攻めかよ・・・まあ、どこまで、と言われた

ら少し、と答えるに限るぜ、聖人さん。」

ここで、火織は一気に悟った。

この男は、危険。

と。

一気に後ろへ下がりを、腰に差してある刀、『七天七刀』へ手を添える。

「・・・魔法名は名乗らなくていいのか？」

「・・・私は魔法名は好きではないのですよ。」

そして、静寂。

「それじゃあ、始めようか。」

宗也の声が合図となり、二人の戦いが始まった。

第二話 『白いシスターさん、（当麻の所に）襲来』（後書き）

諸事情により（普通にテストが近い）ので、金曜日まで更新を中止します。

始まってすぐの小説ではありますが、何卒ご理解をよろしく願います。

第三話 『魔術師、神裂火織』（前書き）

テストが終わりましたので、普通どおり更新していきたいと
思います。

第三話 『魔術師、神裂火織』

最初に動いたのは、火織。

『七天七刀』の柄を掴んだまま、呟く。

「・・・七閃。」

瞬間、火織の上へと延びていたワイヤーが、宗也へと襲いかかる。

火織の考えでは、この男がどうやって七閃を避けるのかを見て、そこから戦い方を考えていこうと考えていた。

だが、そんな火織の考えとは裏腹に、ワイヤーは宗也の顔へと直撃した。

とある無能の集積強撃《h e a p b r e a k》

第三話 『魔術師、神裂火織』

「・・・いたい。」

「・・・」

ワイヤーの直撃を受け、顔へ切り傷を作った宗也が、静かに言った。

「まさかこんなに早かったとは・・・全く見えなかった。」

だが、一回も『見た』。次は余裕だな。」

宗也の言葉に、火織は違和感を覚えた。

一回目は、今。

では、二回目はなんだ？

もちろん、火織は宗也と会ったのは初めてだし、七閃を見せるなんてこと当たり前のようにない。

じゃあ、いつ見たのか。

「ん？何やら考えているが、おそらく思っている通りだよ。この攻撃、俺は喰らう前から知っている。」

まあ、アニメでな。と、心の中で宗也は付け加える。

「・・・そうですか。それなら・・・」

避けてみてくださいー!!」

タン、という刀が納められる音とともに、ワイヤーが宗也へと再び襲いかかった。

「っ!!」

だがそれを、宗也は避けず、『受け止めた』。

まるで、そこへ来るのが、分かっていたみたい。

「ほらな、俺はもうこの技は見切っている。『七閃』は俺には通じねえよ。」

火織は、いとも簡単に自分の技が見切られるものなのか、と少し悔しかった。

「・・・っ、仕方ありません。それならば『唯閃』。」「！何故貴方がそれを！」

『唯閃』

それは『七天七刀』を使った抜刀術であり、一撃必殺といってもいくらかの威力を誇る。

その技を、宗也は知っていた、その事に火織は余計に頭を混乱させ

る。

「いいのか？只の一般人にそんな聖人の力を使った一撃を使っちゃまって。それに、そいつはものすごく疲れるんだろ？」

それじゃあ、『避けられた』とき、お前の勝機はなくなるぜ？」

まるで、もう避ける事が確定しているような言い草。

そんな宗也を見て、火織は少し怒りがうかんだ。

「・・・まるでもう避けることが決まっているかのような言い草ですね。先ほどから全く攻撃してこない貴方のどこにそんな自信が？」

「あつ、それちよいと違う。」

宗也はそんな火織の言葉を否定した。

「だって、今からするからな、『攻撃』」

そして次の瞬間、宗也は火織の視界から消えていた。

「だって、今からするからな、『攻撃』」

そう言ったと同時に、宗也は今までずっと足に『溜めていた』力を『地を蹴りだす』時に、解き放った。

そして、たったのひとつ飛びで、火織の後方へと跳躍した。

（うおっ！すげえこれ！！）

ちなみに、この力を使うのは宗也自身も初めてである。

だが、宗也はこの力が自分の中に初めから在ったような感覚であった。

まあそこは、神様のおかげであろう。

「っ！」

「女の子の顔を殴るのはかわいそうなんでなあ！腹で勘弁してやんよおー！」

そして、自分の持てる限りの全ての力を右拳に込め、火織の腹へと叩き込んだ。

もちろん、一度に溜めることはできないし、数十秒ごとなので、普通の打撃である。

「っーーーーぐう！」

宗也の打撃を受け、火織は地面へと倒れる。

「と、使い勝手がいいのか悪いのかわかんねえなこれ……」

せめて同時に溜めれるようにしてほしかった、と宗也は心の中で嘆く。

「ん？・・・なるほど。ほれ火織さんや、お仲間の魔術師さんが戦ってるぞ。」

そう言っつて宗也は指をさす。

その方向では、宗也と当麻の住んでいる学生寮で、火炎が立ち昇っていた。

「さて、てなわけでお仲間のステイルさんは無能力者の上条さんと戦っているわけです。」

「・・・それがどうしたのですか・・・」

戦う気などもう無いような宗也の態度に、火織はすっかりと戦う気をなくしていた。

「んでさ、火織さんはあの戦いどっちが勝つと思う？」

「普通に考えてステイルでしょう。」

「ああー駄目駄目！」

いきなり声を張り上げ、宗也は否定する。

「ステイルと戦っている当麻を常識の範囲内で考えちゃダメダメ。あいつは普通の人間じゃねえ。」

「つまり・・・何を言いたいのですか？」

「当麻^{あこ}を侮^あつていると、痛い目見るぜっつーこと。まあ、俺^{おれ}が言いたいの^はそんだけ。」

そう宗也が言うと、屋根の端へと歩き出す。

「あ、そついや名前を言っていなかったな。『瀬野宗也』。しがな
いただの高校生だ。じゃあな！」

そして宗也は、何十mはありそんな屋根の上から、何のためらいもなく落ちて行った。

「・・・何がしがないただの高校生ですか。全く・・・」

そう愚痴を漏らしている火織の口元は、微かに笑っていた。

第四話 『月詠小萌と自動書記』（前書き）

・ 今更なんだが、宗也の能力ってチートなんだか違うのかわからん・

使い勝手は悪そうだしね♪

それでは、第四話、どうぞ。

第四話 『月詠小萌と自動書記』

「・・・」

宗也は火織との戦いを終え、自宅（燃えてしまった可能性あり）への帰路を急いでいた。

「い、意外と怖いんですけど・・・戦闘^{これ}。」

言っておくが、宗也は別に喧嘩に長けていたわけでもなく、つい数日前まで一般人である。

そんな人が、いきなりきれいに真つ二つ　なみの殺傷力がある武器を持つ女の方と戦ったのだ。

まあ、その一つの戦闘で戦いに慣れて、「殴るのってサイコおひゃつはあああ！！」となるほどの戦闘狂でもなければ、「戦闘力たつたの5か、ゴミめ。」ていうどこかの戦闘民族でもない。

おそらく、相手が刀を捨てて殴り合いに持ち込んできたら、十中八九宗也は負けていただろう。

「こりゃあ早く戦い慣れしなきゃな。マジで死ぬ。死ねないけど死ぬ。」

ついでに身体も鍛えつか、と宗也は付け加える。

と、独り言を言っているうちに、学生寮前到着。

「・・・いねえ。」

おそらくインデックスを抱えてどこかに行ったのだろう。そこには当麻はいなかった。

「探すか・・・全く手間とらせやがって。」

当麻を探すため、俺は学生寮を後にした。

とある無能の集積強撃《h e a p b r e a k》

第四話 『月詠小萌と自動書記』

「さて、当麻くんはどこかなっ・・・いやがった。」

居た。

みんなが絶賛少し燃えている学生寮に行っているため、人通りがない公園のベンチに、当麻とインデックスはいた。

「ふむふむ・・・俺から見れば少女に自分のコスプレ趣味を押しつけている変態高校生にしか見えねえな。」

「誰が変態高校生だっ！！！」

どうやら聞こえてたらしい、当麻が大声を張り上げてこっちを見ていた。

「よお当麻。何やら訳ありっぱいが・・・魔術師にでも襲われたか？」

「っ！！！！宗也が何故その事を知ってる！？お前まさか・・・！！！」

ちげえよ、と宗也は笑いながら否定する。

「いやはや、実を言うと俺も魔術師の一人に襲われたんでね。そい

「つから詳細は訊いてる。そいつらが何故インデックスを追うかもな。」

「なるほどな……お前よく生きてたな……」

「生憎丈夫だね。」

「はは、と宗也は笑い飛ばす。」

「……で、やばいのか、インデックスのその怪我。」

急に宗也の雰囲気が変わり、打って変って真剣な表情へと変わる。

「……ああ、少なくとも並みの医療機関では治せないくらいな。」

「なるほどな。そうすると……」

魔術なら、どうだ？」

宗也の言葉を訊いて、当麻は何かに気付いたような、そんな表情をする。

「そうだ、おいインデックス！お前の中の十万三千冊の魔道書はねえのかよー！」

当麻の言葉の後、インデックスは小さく「ある・・・」と声を洩らした。

「あるんだけど・・・君たちには無理。」

「・・・っ、なんでだよ！俺は右手が邪魔するかもしれないけど、宗也は無能力者なんだ、何の問題もねえだろ！」

「違うの・・・もう超能力っていうのが駄目なの。」

「それならなおさら、宗也はできるだろ!」

「そういうことじゃないの・・・」

そしてインデックスは、弱々しい口調であるが説明を始めた。

「もともと魔術っていうのはね、君たちみたいな才能のある人間じゃなくて、才能のない人間が使うものなんだよ。

才能がない、それでも才能のある人間と同じことがしたい、そうして生み出されたのが、魔術。」

「つまり、能力開発のカリキュラムを受けている学生たちには魔術を使うことは不可能ってことか？」

俺の質問に、インデックスは「そう・・・」と小さく答えた。

「つまり、言いかえるならば、カリキュラムを受けていない人には、魔術を使うことは可能なんだな。」

俺がニヤニヤ、と笑いながら当麻の方を見ていると、当麻もそれを察したのか、

「そうか！先生だ！！カリキュラムを受けていず、超能力を使えない小萌先生ならっ！！」

答えを導き出した俺等は、早速小萌先生の所へ向かった。

当麻がピンポン、とインターホンを鳴らす。

カチャカチャカチャと連打音が響く。

これだけ押しているのだから中は大参事になっているだろう。

「うつつおおおりやあぁっあ！！まあだまあだぁ！！」

だが、宗也が力を溜めて渾身のスピードで連打しようとしたところ、そのタイミングで扉が開いた。

「はい、今開けますよー」

という声の後に開いた扉の先に居たのは、かわいらしい兎の（おそらくパジャマ）を来た少女だった。

また少女かよ、という言葉は聞こえません。

「って、上条ちゃんと瀬野ちゃん！こんな時間にどうしたんです？隣の家の晩ご飯でも調べに来たんですか？」

「……さすがにその服装はどうかと思うんだが……それにネタ

古い。」

「シスター背負ったまま晩ご飯調べに来る○ネスケが何処にいますか・・・ちようと色々困ってるんで、入りますね先生。」

「おじゃまー」

「ちょ、ちょちょっと、先生困りますうー!!」

と、細い腕で俺等を止めようとするが、強行突破。

言い忘れていたのだが、ここに居る少女こそが、学園都市の俺達の学校の教師、月詠小萌である。

見た目は完璧少女。ぶっちゃけ幼稚園で教師をしても幼稚園児と間違えられるほど。

どうなってんだこの世界は。

「うわ汚な。」

小萌の部屋は、タバコやらお酒やら、警察が見たら一発で捕まりそうな物ばかりあった。

そんな部屋を、小萌は大急ぎで片づけている。

「よいしょっと、布団の準備できたぜ当麻。」

「さんきゅ。」

近くにあった布団を移動させ、そこへインデックスを寝かせる。

「ふえっ！ど、どうしたんですかその子・・・」

「先生・・・実はっ」

当麻が事情を話そうとした瞬間、インデックスの身体が青白く光り出した。

「イ、インデックス!!」

「警告。第二章第六節、出血による生命力の流失が一定量を超えたため、強制的に『自動書記』^{ヨハネのペン}で目覚めます。現状を維持すれば、ロンドンの時計塔が示す国際標準時間に換算して、およそ十五分後に私の身体は必要最低限の生命力を失い、絶命します。」

（これが自動書記か・・・なんか機械みてえだな。）

と宗也は心の中で思う。

「これから私の指示に従って、適切な処理を施していただければ、幸いです。」

「先生、俺救急車呼んできますんで、先生はこの子の話を訊いて、お願いをきいて・・・ああとにかく、よろしくお願いします。」

小萌は怯えながらも、首を縦に振る。

「じゃあ俺はちょっと助け呼んできますわ。知り合いにそれなりに名のある医者がいるんで・・・当麻、行くぞ。これ以上いると治療

の妨げになる。」

「っ・・・先生、この子の事を、お願いします。」

そう言うと、当麻は走って部屋を出て行った。

「それじゃあ、俺も行きますわ。それじゃあ、なるべく早く助けを呼んでくるんで。」

そして宗也は当麻の後に続き、部屋を出て行った。

第五話 『色々異常』（前書き）

どうしよう・・・

一方さんに勝てる気がしないよぉ・・・

第五話 『色々異常』

「・・・こんなもんか。」

そう言つて宗也はペツ！と口から血を吐きだす。

路地でボロボロの状態で立っている宗也の周りにいるのは、宗也よりもボロボロな、不良軍団。

「前世で喧嘩したことなかったのにこの身体能力とは・・・神様がなんか弄つといてくれたのかね？」

喧嘩をしたことがない素人にとっては、ありえない身体能力だったのだ。

バック転してよけたり、

オーバーヘッドキックを脳天に落とせたり、

拳句の果てには「サマーソルトキイイク!!」だ。

これは身体を鍛える意味があるのだろうか。

「時間は・・・2時か。もう一人行ってみっかな。」

宗也は時計を確認すると、そのまま路地の奥へと歩いて行った。

とある無能の集積強撃《heap break》

第五話 『色々異常』

「これはまずい。」

午前9時。

喫茶店で少々遅い昼食をとりながら、宗也は呟いた。

その言葉の真意だが、これまた厄介。

まず、今の今まで宗也は近所の不良へ一人で喧嘩を売りに行っていた。

そして、全て「削除っ!!」。

次に、夜通しで喧嘩をしていたのに、身体に全く負担がこないのだ。

試しに、公園にある鉄棒に足だけぶら下がり、腹筋をしていたのだが・・・千を超えたところで数えるのをやめた。

その時も、息は切れていたが、足は筋肉痛どころか、少しも痛くなかった。

なんだそのチート。

「不死が関係しているのかね。それとも神様がおまけに付けてくれたのか・・・どちらにしても感謝感謝だな。」

まあ、これじゃあ鍛える意味が微塵もないことがわかる。

「今度お礼しに行きたいね。天国ってどうやって行けるんだ？」

死んだら。

人生が終わったら。

生涯に幕を閉じたら。

当然、貴方は死ねないので二度と行けませんよ。

「あーっ！あんたは！！」

「お、お前は常盤台中学の・・・なんだビリビリさんか。」

「ビリビリ言な！私には御坂美琴っていう名前があんのよ！」

呑気にいつインデックス禁書目録の所に行こうか・・・と考えながら歩いていると、ビリビリさんとエンカウント。

意外とエンカウント率高い。

「で、なんのようだ？バイトならいい発電所紹介するけど？」

「からかうなっ！！」

俺がニヤニヤしながら言うと、美琴は少し起こり気味に言った。

「で、真面目になんのようだ？俺はこの通り忙しいんだが。」

「どの通りよ・・・えっと、あんたあの男がどこに居るか知ってる？」

あの男、とは大方当麻の事であろう。

宗也は小さいため息を吐く。

「・・・お前、リベンジでもしにいくつもりか？」

「当然よ！学園都市に七人しかいないレベル5の第3位がこんなざまだったら他のレベル5に会わせる顔がないわ！！」

バトルジャンキー
この戦闘狂め、と宗也は心の中で言う。

（・・・ちようどいい。）

宗也はある事を考え付いたのか、ニヤリと顔を歪める。

「なあ、そんなに暇ならさ、ちょっと俺の相手してくんねえかな？」

美琴は数秒黙った後、遅れて「ハア!？」と驚愕の声を洩らした。

「・・・本気なの？」

「ああ。」

人気のない河原、そこで二人は対峙していた。

「私は超能力者（レベル5）。あなたは無能力者（レベル0）。戦いになんてならない。」

「どうだか。意外とあっさりと負けるかしんねえぞ？お前が。」

宗也の挑発に美琴は頭に血を登らせ、激昂した。

「っ！どうなっても知らないからねっ！！」

美琴はコインをチャリンと上に弾き、そして、

「・・・来る。」

レールガン
超電磁砲を打ち出した。

人間の動体視力では、目視できないほどの速さを出しながら、宗也に迫る。

「見える。俺もう人間じゃねえのかな・・・」

だが、それを宗也はその超電磁砲レールガンを見切り、少しだけ身体を横に逸らして避けた。

「っ！避けられた！！」

「余所見は禁物つと。」

瞬間、宗はずっと足へ溜めていた能力を解放し、美琴の後ろへと跳躍した。

そして、蹴りを頭に。

攻撃を受け、美琴が横へと吹っ飛ぶ。

「ふう。危なかったあゝ、直撃するのを想像すると怖くなって来たぜ。」

「・・・意外とやるじゃない。」

美琴が何事もないように立ち上がり、感嘆の声を洩らした。

「まあな。だから手加減なんて必要ねえぜ？」

「その言葉、後悔させてあげるわ!!」

美琴は、地に手を当てる。

そして、そこへ電気を送り込む。

その手に、みるみると砂鉄が集まっていき、やがて剣となった。

「・・・さっきの言葉、訂正してもいいか。」

「もう遅い!!」

美琴は砂鉄の剣を構え、宗也へと走った。

「くっ!!」

そして、振り下ろす。

宗也はそれを、バック転をしてよけた。

「それ痛そうだから・・・しまってくださいね?」

「これ?地中の砂鉄をただ操って、空気を振動させてるだけだから。当たっても綺麗にスパッといくだけだと思うよ?」

「いくだけ・・・ねえ？」

今度は、宗也が美琴の方向へと走る。

「動きが直線的よ！」

美琴は砂鉄の剣を、横へと振りかざす。

宗也はそれがかがんで避け、その体制から蹴りをくりだす。

狙うは剣ではなく、それを持つ剣。

「くっ！」

案の定。蹴りは美琴の腕へと当り、剣を離す。

そして、操る為の腕がなくなった砂鉄の剣は、バラバラになって地へと舞い落ちた。

「やっぱりな。腕が離れれば砂鉄は元の砂に戻ったか。」

「・・・あんた本当に無能力者（レベル0）？」

「ああ、一応な。」

その答えに、美琴はフン、と鼻で笑った。

「さて、そろそろ決めるかな。」

「そうね。そろそろ決めよう。」

そう二人は言うつと、宗也と美琴はそれぞれ右手を、相手に向けた。

「これで、終わりっ！！」

そして、美琴の右手の先へと電撃が集まっていく。

「
今だあ！！」

宗也は、先ほどからずっと溜めていた右手の拳を、

美琴は電撃を、

「地砕きい！！！！」

思いつきり、地へと振り落とした。

辺りが轟音とともに、激しい揺れが襲う。

「っ!!」

美琴の超電磁砲レールガンがバランスを崩したために空へと放出される。

美琴は慌てて自分の身体へと電気を纏わせようとするが、それも遅く、

美琴の眼前には、拳を大きく振り上げた宗也がいた。

第六話 『炎の魔術師、遭遇。』（前書き）

注意ですが、主人公はあまり超電磁砲の物語の方には介入しません。

たまに介入する程度です。

・・・っていうかタイトルがネタバレということに最近気付きつつある。

第六話 『炎の魔術師、遭遇。』

「・・・ああもうっ！なんで無能力者のくせにこんなに強いんだよ！！」

「わはは、鍛え方が違っんだ鍛え方が。」

あの後、宗也の拳は美琴の腹に入り、気絶。

つまり宗也の勝ちとなった。

「それじゃあな、お前もこんなところで道草食ってねえでお友達の風紀委員でも助けにいきな。今ピンチかもよ。」

「なんであんたがそんなことわかんのかよ？」

だって未来してますから、と宗也は言えるはずもなく、

「なんとなくだよ、年上の忠告は訊いた方がいいぜ？」

それだけ言って、宗也は走り去って行った。

「・・・結局どういうことよ。」

虚しく呟いた美琴の声が、周囲へとこだました。

とある無能の集積強撃《h e a p b r e a k》

第六話 『炎の魔術師、遭遇。』

さて、御坂とのバトルから時間は流れ、今は二十四日、つまり3日後である。

何故か、と言われると、作者の都合と返すほかない。

その日、宗也は部屋（何故か小萌先生の）で一人、うーんと唸りながら考え事をしていた。

「さて、今日の約夜に当麻が神裂さんと遭遇。今日の昼ごろには美琴達が『AIMバースト』と戦闘。どっちも介入できるが……」

できるだけ美琴達の方への介入はやだな、と宗也は付け加える。

「だって勝てる気しないんだもの・・・回復するのかなにそのチート。」

不死のこの人が言えたことではない。

だって貴方の方がチートなもの。

「・・・よし、超電磁砲への介入はやめよう。だってチートの塊と戦う理由ないし」それに不死のことばれる危険もあるし。今日は夜までお喧嘩の時間だ」

いや貴方の方がチー（ry

ちなみに、おをつけたのはちょっと上品になるから。

まあ喧嘩っていう時点で上品じゃないね、うん。

「おっふる、おっふる、おっふる」

はい、再び時間は流れましての夜。

宗也と当麻はインデックスと一緒に近くにある銭湯へと向かった。

「とうまつ、とうまつ」

「ん？なんだ？」

そう当麻が返事をするインデックスはニコリと笑って、

「何でもない。用もないのに名前が呼べるってなんかおもしろいかも。」

「そうかい。」

「……お前らは新婚の夫婦か！居づらいんだよ！この雰囲気！！」

宗也は我慢ができなくなったのか急に大声を出す。

「なんですか！？俺を無視してそんな会話しちゃって楽しいですか！？」

「そうや、ちょっとうるさいかも。」

「ああ、うるせえぞ宗也。近所の人に迷惑だろ。」

そう二人に注意されると宗也はしょんぼりと沈んだ。

「そうだとつま、訊きたいことがあったんだよ。こもえが言ってたコーヒー牛乳ってなに？カプチャーノみたいなもの？」

「んなエレガントなもん銭湯にはねえよ。」

「そういえば、昔牛乳に麦茶を入れるとコーヒー牛乳の味になる、

つったのだあつたんだが、当麻知ってたか？」

「知らねえしやったことがねえよ。貧乏だしな。」

確かに、お前にはそんな余裕ねえか、と宗也はハハハと笑いながら当麻に言う。

「そうだ、イギリスの風呂ってどんな感じだったんだ？小さいって訊いたが。」

そう宗也がインデックスに訊くと、インデックスは少し顔を曇らせて返した。

「・・・その辺はよくわからないかも。私、気が付いたら日本に居たから、向こうの事はちよつとわからないんだよ。」

「なるほど、だからそんなに日本語ペラペラなんだな。」

ううん、とインデックスは首を横へ振って否定した。

「そういうことじゃないの、私、生まれはロンドンで、聖ジョージ大聖堂の中で育ってきたらしいんだよ。どうもこっちに来たのは1

年頃からいらしいんだね。」

「らしい？」

「記憶がなくなっちゃってるからね。」

インデックスの唐突の告白に、当麻は少し驚いた。

宗也が驚いていないのは、まあ、知ってたからだね、うん。

「最初に目を覚ました時は、自分の事もわからなかったからね。昨日の晩ご飯のことも思い出せないのに、魔術師とか、禁書目録とか、インデックス必要悪の教会とか。そんな知識ばかり頭の中でぐるぐる回って、本当に怖かった。」

「じゃあ、どうして記憶を無くしてしまったのかも、わかんねえのか？」

「うん。」

インデックスがそう答えると、当麻は少しいらついたような表情をする。

そして、静寂。

ふと、宗也が後ろを振り返る。

そのまま、宗也は硬直した。

どうした、と当麻の声がかかる。

「・・・なあ、当麻、俺ちょっと寄るところがあるからさ、先行
つててくんね。」

「?どういつことだ?」

「いやさ、ちょっと俺コーヒー牛乳よりフルーツ牛乳派だからよ。
コンビニで買ってくるわ。インデックス、当麻のこと頼むぜ。」

「うんっ!」

そして、宗也は歩きだした。

「誰かに尾けられてる。ちょっと見てくるわ。」

そう当麻の耳に言葉を残して――――

「と、これでいいのかい？魔術師さんよお。」

人一人いない、交差点の真ん中で、宗也は誰かに訊くように呟く。

「インデックスを巻き込みたくないならついてこいって、それはお前らの方だろうが。で、何の用？」

そう宗也が言うと、後ろから赤髪長身の男が歩いてくる。

「・・・ちよつと気をそらすだけだよ。神裂から君の事は危険、と伝えられてねえ。全く、魔力一つ感じられない男のどこが危険なんだか。」

そこへ現れたのは、炎の魔術を得意とする魔術師、ステイル・マグヌスだった。

第六話 『炎の魔術師、遭遇。』 (後書き)

ステイルの口調が難しい。

第七話 『ステイル』マグヌスの猛攻』（前書き）

ちよつと遅れてしまいました。

いやはや、ステイルの口調が全く分からないからね、四苦八苦してたのよ。

それでは、第七話、どうぞ。

第七話 『ステイルⅡマグヌスの猛攻』

「炎よー！ー！ー」

ステイルがそう言うと、手に持つタバコの火がだんだんと大きく、激しくなっていく。

ステイルはそれを、横へと投げ捨てる。

そして、その炎がステイルの手へと集まり、大きな球となった。

「おい、お前少しは落ちつけて。初対面のやつに魔術使って攻撃する馬鹿どこにいる。」

「巨人に苦痛の贈り物を！ー！ー！ー！ー！」

ステイルの手から離れた炎が、轟音と熱風とともに宗也に襲いかかる。

「・・・話し合いの時間もくれねえのかよ。」

宗也はそれを、横へ避けるのでも上へ跳ぶのでもなく、わずかな隙間、下へとしゃがんでよけた。

だが――――

「うおちゃあぁ！引火してる髪に引火してるってえ――！！！」

当然全てを避け切れる筈が無く、髪へと引火した。

とある無能の集積強撃《h e a p b r e a k》

第七話 『ステイル』マグヌスの猛攻』

「・・・ちよいと強すぎたかな。只の人間には。」

ステイルは新しいタバコに火をつけ、煙が上がっている所を見ながら言った。

「ふん、神裂が只の人間じゃない、と言っていたが勘違いだろう。
簡単すぎて『魔女狩りの王を使う暇もなかったね。つまらない。』
イノケンティウス

そしてステイルは立ち去ろうとする。

そのステイルの背中に、黒い影が迫っていた。

「っ！」

気配と殺気に気付き後ろを向くも、それと同時にステイルは蹴りを受け、後ろへと吹っ飛んだ。

「ふう、あやつく中までおいしく焼けました♪状態になる所だったぜ。」

「・・・無傷な状態でよく言えるもんだね、君は。」

そこに立っていたのは、肩で息をしながらも無傷な宗也だった。

「馬鹿言え。俺だって攻撃喰らったさ。見ろよ、折角の髪が少し燃えたぞ。」

「それを傷とは思わないと思うけどね。」

ステイルは立ちあがって、少し笑みを浮かべた状態で言った。

「ともかく、攻撃を喰らわなかったのはちよつとシヨックだね。．．
．．ということで少し本気を出させてもらうよ．．．．」

ステイルの雰囲気さがらりと変わった。

「世界を構築する五大元素の一つ、偉大なる始まりの炎よ。それは生命をはぐくむ恵みの光にして、邪悪を罰する裁きの光なり。それは穏やかな幸福を満たすと同時に、冷たき闇を滅する凍える不幸。」

ステイルはどんどんと詠唱をしていく。

まるで闇を滅する光、悪を罰する善のように。

「その名は炎、その役は剣、顕現せよ！我が身を喰らいて力と為せ

「……………!!」

そして、ステイルの背後が炎上し、爆風と熱風が宗也へと襲いかかった。

「あつっ！なにあれっ！まさかの炎の化物さん！？化物なんか倒せねーよ陰陽師よんでこいつてえー！！！」

ステイルの背後から噴き出した炎は、やがて一つの形を成す。

それは、炎に包まれた、炎で人の形を成していた。

「イノケンティウス魔女狩りの王。その意味は、必ず殺す。」

「イノケンティウス魔女狩りの王の右腕が、宗也へと振り下ろされた。

「イマジンプレイカー俺は幻想殺しなんて持ってないんでなあ！普通に避けるう！！」

宗也はそれを素早く後ろへと下がって回避し、瞬時に標的をステイルに定めて駆けだした。

ルートは、イノケンティウス魔女狩りの王の横。

「こつちだあ！！」

宗也は駆けながら攻撃を誘う。

「神さんこちらあ、手の鳴る方へえ！！」

イノケンティウス魔女狩りの王の右腕が、宗也へと振り下ろされる。

「甘いつ！！」

宗也はそれを左に跳んでよけ、そのままステイルめがけて、駆ける。

ルートは、直線。

イノケンティウス魔女狩りの王は、右腕による攻撃をした後で、隙ができる。

「もらったあああ！！」

宗也はスピードを上げていく。

「甘いのはお前だっ！瀬野宗也あ！！」

瞬間、宗也の真横へと位置していたイノケンティウス魔女狩りの王が、爆ぜた。

至近距離での火炎が、宗也へと襲いかかり、

「があっ！！！！」

宗也の右腕が、炎によって瞬時に燃え、黒く焦げる。

「灰は灰に、塵は塵に、吸血殺しの紅十字い！！」

さらに、ステイルから二つの炎が、宗也へと襲いかかる。

右には、爆ぜたものの、再び姿を形成しているイノケンティウス魔女狩りの王。

前には、ステイルによって放たれた二つの炎。

右腕は、黒く焦げて腕から落ちた。

結果は、誰がどう見ても歴然だった。

宗也が、どんな攻撃を受けても回復する、『アンデット
不死』でなければ。

「はあぁっ!!」

宗也は回復した右手と左腕で、前からきた『吸血殺しの紅十字』を受け止める。

二つの手が、魔術によって燃えて、腕から焦げ落ちた。

だがその手も、一瞬にして回復する。

「なにぃ！！『吸血殺しの紅十字』と『イノケンティウス魔女狩りの王』二つの攻撃を受けても、傷一つつかないだぁ！！！」

「ゲームオーバーだ。コンティニューして出直してきなぁ！！！」

そして、先ほどから溜められていた右足による強烈なけりが、ステイルの腹へと深く吸い込まれた。

第八話 『謎の赤い物体X』（前書き）

少々遅れてしまい、申し訳ございません。

それでは、第八話、投下っ！！

第八話 『謎の赤い物体X』

骨が折れた感触がした。

骨が砕けた感触がした。

「知・る・か。死んでねえから大丈夫なはずだ。加減はしたしな（ほんの少し。例えるならば砂糖一粒。）」

あの後、ステイル＝マグヌスは瀬野宗也の渾身の蹴りを腹に喰らい、ぴくりとも（小刻みに震えてました）動かなくなつた。

一応宗也は近くに寄つて調べたが、脈はあつた。

その後、宗也は近くにいた『魔女狩りの王』イノケンティウスが爆ぜたのを見て、ビッて逃走した。

「もし重傷でも大丈夫だろ。ほら、俺だつて腕すぐ直つたんだし。」

ステイル おまえ
魔術師を規格外と一緒にするな。

「さて、不良神父は撃退したことだし、家（俺の家じゃないよ）に帰ろうk……」

宗也は帰路につこうとしたが、奥の道の人だかりが目に入った。

「うん？なんかあったのかっ……て、当麻かよ……」

少々気になった為に、近くによって見る宗也。

そこには、手が血だらけに染まり、身体がボロボロで倒れている上条当麻がいた。

「救急車よんだ？」

宗也は隣にいる女子高生に訊く。

「はっ……はい。一応呼びましたけど……」

「じゃあそれ来たらキャンセルしといて。大した怪我じゃなかったみたいなんで歩いて帰りました、とでも言っとけばいいだろ。」

「そうですか……ってええ!？」

よいしょっ、と宗也は道に倒れている当麻を担ぐ。

「君の迅速な対応は誰かを救った、ような気がするから君は誇っていい、ような気がする。それじゃあな、見返りはいつか後ろの奴に言え。俺は関係ない。」

そして宗也はそのまま当麻を担ぎ、家の方向へと歩いていった。

「……結局誇っていいのかな？」

一人、女子高生の声が辺りをこだました。

とある無能の集積強撃

第八話 『謎の赤い物体X』

「ん・・・」

小萌先生の部屋で眠っていた当麻が、目を開ける。

「とうま・・・」

「気がついたか、馬鹿野郎。」

「此処は・・・つつう!!」

当麻は身体を起こそうとするが、不意に右腕に鋭い痛みが走る。

「とうま! まだ起きちゃ駄目だよ!!」

「インデックスの言うとおりだぞ。右腕、何か鋭利なモノでやられたらしいからな。その痛みは結構続くぞ。」

当麻は宗也とインデックスの言葉を訊いて、そこで動きを静止させた。

「日が昇ってるつーことは・・・俺は一晩中寝ていたのか・・・」

「一晩なんかじゃねえよ。お前は三日。三日間、寝たきりだったんだぞ。」

三日あ!?!と当麻は驚きの声を洩らす。

「礼なら俺じゃなくインデックスにしろ。ずっと傍でお前の事看病してたインデックスによ。」

「っ・・・三日も、かよ・・・」

「とにかく、腹減ったろ。今飯作ってやるから待ってる。」

よつと、と宗也は腰を上げる。

「わりいな。」

「いいっていいって。埋め合わせはちゃんとしてもらうし、な。」

当麻は宗也の言ったことに少し顔を青くしたが、すぐに笑みを浮かべた。

約十分後、とりあえずのおかゆが完成した。・・・のだが・・・

「おい、なんだこれ。」

「なんだ、って決まってんだろそんなの。おかゆだよおかゆ。」

怪我人に喰わせるもんといったらおかゆだろ、と宗也は何故か誇らしげにいう。

「そうか、じゃあ質問を変えさせていただこう。何故！おかゆがこんな色しているんだよっ！！」

そう、十分後に宗也が作ってきたおかゆの色は、赤を通り越し、深紅に染まっていたのだ。

「馬鹿野郎。俺は普通どおりに作ったただけだ。何にもおかしいところはない。」

「じゃあ材料を言ってみろよ。」

「ご飯、卵、唐辛子、南蛮、豆板醤、ラー油、タバコ、アウトオオオオオオオオオオオ！！！！」なにがだよ。どこもおかしいところはないだろうが。」

「お前の脳みそがおかしいんだよ！怪我人に激辛おかゆを喰わせる馬鹿がどこにいる！！」

「怪我してる時こそ激辛料理を食べなくてどうするっ！？口にした時に舌触り、高まる血圧、滴る汗・・・ほらっ！」

「ほらっ、じゃねえよこの野郎！！」

むぐぐ・・・と二人は眉間にしわを寄せ向かい合う。

「とにかくだ。折角俺が作ったものを残すのは俺のプライドが許さ
ん。インデックス、当麻に優しく食べさせてやってくれ。腹がすこ
く減ってるらしいからな。」

「うん。怪我人の看病はシスターさんに任せたらお手の物だよ。」

そしてインデックスは宗也から赤い物体Xを受け取り、当麻ににじ
り寄る。

「あの、インデックス・・・さん？」

「とうま、早く口を開けるんだよ。」

「えっとあの・・・今は少し・・・」

「何で？食欲ない？」

「うぐぐ・・・」

ほんの数秒間、悩んだ末に当麻は口を開けた。

「なんで恐ろしそうに口を開けるんだよ・・・俺料理には自信あるんだぜ？」

「できれば他の料理でお前の腕を確かめたかった・・・」

「とうま、あーん・・・」

「くっそ・・・あ、あーん・・・」

インデックスは当麻の口の中へゆっくりと運ぶ。

そして当麻はそれを、口に含んだ。

「なんだっ！結構うめえじゃねえか！！」

「だから言っただろうが。俺料理うまいって。」

当麻は意外とおいしかったことに安堵したのか、その赤い物体Xを口の中へとどんどん入れていく。

「いやゝ心配してそんぐはあっ！！！！」

当麻は不意に口の中から吐き出した。

「
．．．．ぐわああああああああああああああ
ああああ！！！！なんだこの後から来る猛烈な辛さはっ！！耐えら
れ．．．って

ああああああああああ！！！！みっ！水っ！！誰か水をくれ
えええ！！！！」

インデックスは台所へと水を取りにいこうとするが、それを宗也が止めた。

「馬鹿。辛いもんを食べるときに水を飲むとか邪道だ。そのままにしておけ。」

「そうやお前覚えてろよこのやろおおおおおおおおおおおおおおおおお
おおおおお！！！！！！」

数分間、小萌宅からは断末魔の叫び声が絶えなかったそう。

「・・・なんですか、中から聞こえるこの叫び声は。」

「さあね。僕には知ったこっちゃないよ。」

扉の前にいる魔術師二人は、ため息交じりに呟いた――――

第九話 『幻想殺し』（前書き）

くそお・・・

超電磁砲のゲームがほすい・・・

けど金がない・・・

そんなWingです。

それでは第九話、どうぞ。

第九話 『幻想殺し』

時は少々遡り、魔術師たちが小萌宅を訪れる前。

「・・・楽しそうだねえ・・・」

ステイルが当麻達の様子を観察しながらふと声を洩らす。

「インデックスの周りにいるもう一人の少年の事が調べ終わりました。」

「今更になって・・・ねえ？僕はもう完膚なきまでに叩きのめされた後だってのに。」

「何故かあの少年のデータはセキュリティが恐ろしくきつかったのですよ。」

ステイルはタバコを取り出し、それに火を点ける。

「・・・それで？一応結果を訊いておこうか。」

「あの少年・・・瀬野宗也のレベルは0です。何の能力もない、無^レ能力者^{ベルゼロ}でした。」

やっぱりねえ・・・とスタイルはため息交じりに呟く。

「つまり僕たちは何の能力も持っていない一般人に、倒された・・・全く、異常な破壊力と自己再生を持ちながら、あれが一般人とはね。超能力者はどれほど強いのか。」

「・・・さすがに上条当麻は魔術が効かなかった、だけで片づけられますが・・・瀬野宗也はどうも裏がありそうですね・・・」

「魔術^{マジック}側の可能性は？」

「ありません。」

火織はきっぱりと否定した。

「もしそうなら私たちが真っ先に気付いているはずです。」

「だよねえ・・・」

ステイルはふう、とタバコを吸う。

「とにかく、相手がだれであろうと私たちのやることは変わりません。・・・例えばあの子に嫌われようとも。それが結局はあの子の命を救うことにつながるんですから・・・」

「わかっているよ。」

ステイルはまだ少ししか吸っていないタバコを下へ捨て、ゆっくり立ち上がった。

とある無能の集積強撃《h e a p b r e a k》

第九話 『幻想殺し』

当麻が絶賛悶絶中の頃、ピンポンとインターホンが鳴った。

「ん？小萌先生か？当麻うるさいから黙ってて。今出てくるから。」

「誰のせいだっつーのお・・・」

当麻はインデックスより渡された水（仕方ないから宗也が許した）をがぶがぶと身体へ急いで流し込む。

宗也はよっこらしよ、と立ち上がり、玄関へ向かった。

「あれ？家の目の前で何やってるんです？上条ちゃん！なんだか

知らないけど上条ちゃんにお客さんですよー！」

「客う？こっちはそれどころじゃないっつーの……」

「それはお前の都合だろうが。」

「誰によって引き起こされた都合だよっ！！」

「自分で起こした都合だろう！？」

「自分でえ！？あれがどう見たら自分でやった風に見えるんですか！？どう見てもあれは上条さん被害者でしょう！？」

むむむ……と二人は客が来てるのにもかかわらず、言い争いを始める。

「とっ、とりあえず先にお客さんが来てるので喧嘩はやめてくださーい！」

二人は言い争いをやめ、扉の方を見る。

そこには、ステイルⅡマグヌス、神裂火織の二人の魔術師がいた。

宗也はその二人を見た瞬間顔をしかめ、

「お帰りください。出口は貴様の後ろだああ！」

そのままステイルへと跳びかかり、足を顔へ絡めてそのまま叩き落とした。

いわゆる、フランケンシュタインー。

外に何やら痛そうな鈍い音が響き渡る。

「いつ、いきなり何をするんだい君は!？」

「うるへえ。お呼びじゃないからお前らは速攻で帰れ。帰れ。K A
E R E
」

「そっだよっ! そっやの言うとおりに帰って!!」

インデックスも宗也に便乗し、魔術師二人へと言う。

「リイ、リミットまで残り12時間38分、逃げ出さないかどうか、
足枷の効果を見にきたただけだよっ!」

「足枷っ・・・!」

当麻が悲痛な声を洩らす。

「その玩具を取り上げられなくなったら、もう逃げようなんて考
えないでください。わかりますね?」

火織がインデックスへと言う。

インデックスは僅かではあったが、首を縦に振った。

「用は果たしました。帰りますよステイル。」

「・・・帰るからどいてくれないかね？」

「もちろんだ。俺だってこんな不良神父の上に乗っていたくなんかねえよ。」

そう言っで顔と腰を上げる宗也。

「それでは。」

二人は立ち去ろうとする。

すれ違いざまに宗也は火織へ、

「・・・あまり上を信じるな。足元をすくわれるぞ?。」

と、忠告にも聞こえるヒントを、耳へ残した――

「っ！くそお！なんかねえのかぁ！！」

あれからずっと、当麻はインデックスの記憶を消さずにすむ方法を探している。

小萌の家の全ての本を見、脳科学の先生への通話もした。

だが、決定的ともいえる情報は、得られなかった。

「・・・荒れてんなあ当麻・・・」

「るっせえよ！そんな口叩く暇あったら宗也も探すの手伝ってくれ！」

そこへ、近所のコンビニへ結構遅い夕飯を買いに行っていた宗也が帰ってきた。

「いやさ、俺もさつきからずっとやけになって探してたけどさ、俺なんのことかわからないんだけど。お前いったい何を探してる？」

「・・・そうか、宗也へは言ってなかったっけ。インデックスの事。」

そう当麻は言つと、宗也へと説明を始めた。

インデックスが完全記憶能力を所持していること。

それを使って脳内へ10万3000冊の魔道書を記憶していること。

それに脳の85%を使っていて、残りの15%では1年生きるのが精いっぱい、記憶を消さないと死んでしまうこと。

それをつつぶんを晴らすように、悩みを話すように、宗也へと打ち明けた。

「なるほど。つまり脳の15%しか使えないから、1年ごとに記憶を消さないと死んでしまう。当麻はそれを食い止めようとしてるんだな。」

「そつだよ！・・・くっそ、なんかねえのかよ手掛かりは！..」

「それおかしいだろ。」

宗也の一言が、当麻の耳にはすぐくはつきりと聞こえた。

「だってさ。人間は100年は確実に生きれるだろ？まあ老死とかは置いといて。これは間違いないな。」

「ああ。」

「んでそのうちの85%を使っている。つまりあと記憶できるのは15%。仮定すると・・・？」

「っ！・・・15年・・・でもっ！インデックスは完全記憶能力をっ！！」

「それでもさ、実際は15年以上あるんだぞ。100年って仮定したからそうなっただけで、実際はもつとたくさん記憶を残せるんだからさ。それに、15年記憶できる脳を1年で使いきっちゃうとか、どれだけ完全記憶能力に容量とってんの？って話。」

「それじゃあつまりっ！」

「おう。その情報が間違っているか……」

「そういう風に誰かにさせられたか……」

そういうことよ、と宗也はニカツと笑いながら当麻へ言う。

そこで午前0時を示す掛け時計が鳴った。

「つまり、教会がインデックスの頭を弄って、一年周期で記憶を消さなきゃ死んでしまう細工をしたんだ。……ならその教会がした細工は何処にある？」

そこで、ボタンと扉の開く音がして、ステイルと火織が入ってきた。

「時間だ。」

「待つてくれっ！ーあと1分だ！いや30秒でもいい！ー！」

当麻が慌てながらもステイルにそう言う。

「つまり何だ、頭に何か細工をしたんなら頭に触れればそれが解けるんじゃないか・・・」

当麻はそう呟いて、インデックスの頭へと触れる。

だが、何の変化も起きなかった。

「あれっ、何の変化もねえってことは、まだ異能力の力に触れてない？ちゃんと頭へは触れているはず・・・」

「・・・何をしているお前たちは。」

「うるせえよ赤髪糞神父。もうちよつとであつと驚くなにかが始まるんだからよ……」

宗也はステイルへとそう言いながら、自分も頭へ手を当てて、考え事を始める。

「つーことは、まだ触れてない部分がある……?」

「……そうかつ! 当麻っ! おそらく教会が何か仕掛けたのは喉の奥だ! そこならよっぽどの事がなけりゃあ気付かないっ!」

「喉の奥……」

宗也の言葉を訊いて当麻はインデックスの口の中を見る。

驚いた表情を数秒し、それからインデックスの口の中へと手を入れた。

その光景を、魔術師二人は無言で見ている。

そして、宗也がすごく小さな声で笑みを浮かべ、呟いた。

「さあ、楽しい楽しいパーティーの、始まりだーーーー」

第十話 『禁書目録』（前書き）

遅れてすみませんっ！

何分リアルが忙しかったものですから・・・

それでは、第十話、投下っ！

第十話 『禁書目録』

上条当麻がインデックスの喉へ指を入れてしばらくすると（これ事情知らない人見たら当麻変態だよねww）、当麻の指が何かに遮られたようで、急に弾き飛ばされ、尻もちをついた。

「なにイ！？」

ステイル「マグヌスが驚愕の声を上げる。

それもそのはず、さっきまで布団で苦しんでいたインデックスが、何事もなかったようにむくりと、立ちあがって来ているからである。

その目には、赤く光るあやしげな線。

そして、素早い動きで俺達の眼前へと移動し、

「なっ！」

「ぐっ！」

「がつ！」

「んっ！」

奥へと吹き飛ばした。

当然、まだ強大な魔術を使っていない。

「警告。第三章第二節、第一から第三までの全結界の貫通を確認。再生準備――失敗。自動再生は不可能と判定。現状十万三千冊の書庫の保護のため、侵入者の迎撃を優先します。書庫内の十万三千冊により、結界を貫通した魔術の術式を逆算――失敗。該当する魔術は発見できず。術式の攻勢を暴き、対侵入者タイプのローカルウエポンをくみ上げます。」

「おいおい、なんかやばい雰囲気なんですけど・・・」

俺が小さな声で呟く。

皮肉に言ったつもりなんだが・・・自分でも自分が笑っていることくらいはわかるぞ。

「侵入者駆除に対して、最も有効な魔術の組み合わせに成功しました。これより特定魔術、『聖ジョージの聖域』を発動、侵入者を破壊します。」

そして、眩い光とともにインデックスから光線が、発せられた。

第十話 『禁書目録』

「^がっ！！」

当麻は発せられた光線を咄嗟の行動だろうか、右手で受け止めた。

「まさかつ・・・」

「何であの子が・・・魔術を・・・」

当の魔術師二人は、インデックスが魔術を使っている所を見て、呆然と立ち尽くしている。

「決まってるだろうがっ！インデックスが魔術を使えないなんて、教会の嘘だっただけじゃねえか！ああそうだよ、一年おきに記憶を消さなきゃ死んでしまうつても大嘘だっ！こいつの頭は、教会の魔術に圧迫されてただけなんだよっ！！」

そして、当麻がずるずると後ろへと押されていく。

「冷静になって考えてみやがれ！禁書目録なんて残酷なモノをこいつに背負わせやがった連中が、てめえら下っ端に、全ての真実を「はいわかりました」みてえに心優しく教えるわけねえだろうがっ！なんなら、インデックス本人に訊いてみればいいだろうがっ！！」

「『聖ジョージの聖域』は、侵入者に対して効果がみられません。他の術式に切り替え、侵入者の破壊を継続します。」

インデックスから発せられる光線の威力が、より強くなった。

先ほどよりもはやいスピードで、当麻が後ろへと押されていく。

「・・・っ！Fortiss931っ！！」

ここで、ステイルがやっと動く。

魔法名を高らかに名乗り、ルーンが描かれた紙をそこら中の壁、天井へと貼り付ける。

そして、当麻の背中へと手を置き、後ろから支えた。

「今ならっ！！」

宗也も今になってやっと動く。

当麻の横へと移動し、インデックスへと向かって駆けた。

「馬鹿！宗也！！」

「安心しろっ！ちょっとウルトラマン顔負けの光線を当麻からそらすだけだ！」

一瞬で地を蹴ってインデックスの顔下へと移動し、手加減した拳で顔へアッパーをかました。

「んっ！」

インデックスの顔の向きが変わり、光線は当麻の手から反れ、小萌の家の天井を吹き飛ばして空へと消えた。

「もういっちょおっ！」

宗也は間髪いれずインデックスの腹を殴り、吹き飛ばした。

「よっと、大丈夫。手加減はした。」

宗也が当麻の隣へと戻り、言った。

「宗也……」

「ん？何その目？確かに俺は人と違って少し特別だが、別に自殺願望がある人じゃねえぞ？」

「いやそついうことをききたいんじゃないやなくて！」

宗也はこの状況下でも子供のように無邪気に笑う。

「・・・お前は何者なんだ。」

「・・・無礼者とも言うておこつ、つと、くるぞつ！！！」

そして、何事もなかったようにインデックスが、立ちあがった。

「うへっ、ここまで無傷だと、いささか俺も傷つくねえ・・・」

「第六章第十三節、新たな敵兵を確認、戦闘思考を変更。戦場の検索を開始――完了。現状最も難易度が高い敵兵、『瀬野宗也』の破壊を最優先します。」

「目標が俺に変わった。当麻、今のうちにインデックスのところに行って叩き込めっ！」

「……わかった。戦闘^{これ}終わったら色々説明してもらっかんかった！！」

当麻がインデックス目掛け、走り出す。

「これより、『瀬野宗也』の破壊を優先するため、術式を『聖ジョージの聖域』から、『聖使徒イアコフの福音』へと変更。速やかに侵入者を破壊します。」

そこで、インデックスの雰囲気がからりと変わった。

そして、数秒遅れて眩い光と激しい衝撃音が、その場へと響き渡った。

「うがあっ！！」

一瞬のうちに宗也の右半身が、『聖使徒イアコフの福音』によって消滅した。

「宗也あー！！」

「速く行けばええ!!」

宗也の身体は夥しい血にまみれていたが、恐ろしい勢いで修復を始める。

「……っ、やっぱりいてえもんはいてえよな……」

「『瀨野宗也』の破壊に成功。これより次の侵入者『上条当麻』に標的を――中止。引き続き侵入者『瀨野宗也』の完全破壊を優先します、」

インデックスが当麻へと標的を変更しようとしたが、宗也の身体が回復してきていることに気付いたのか、それを中止した。

「……まずっ。」

「間に合ええええええ!!」

そして、再びインデックスから『聖使徒イアコフの福音』が発せられ、宗也は意識を失った。

「・・・目覚めが悪い。」

目を開けたら知らない場所にいた、というデジャブな光景で、俺は目が覚めた。

「まさかアニメや小説に出てきてない術式を使うとはねえ・・・手加減しろよあの自動書記。」

俺は自分の身体につけられてある点滴やらなんやらをぶちぶちと取りながら言う。

「・・・さて、めでたく身体も感知したようだし、当麻へと会いに行くか。」

やっぱり記憶喪失してんのか？と疑問を浮かべながら、俺は病室を出た。

・・・途中看護師さんが俺を見て啞然としてたけど、知らんぞ俺は。

そして歩いてしばらくすると、当麻の病室を発見。

何やら話し声が聞こえるが、構わず突入することにする。

「はいどーんっ！」

「「っ！」」

どうやら中にいたらしい当麻とカエル顔の医者がびっくりしている。

「き、君は確か入院していた・・・」

「知らん。なんか自然治癒力で全部治った。さすが人間。自然治癒力ばんざーい。」

「し、信じられん・・・」

なんか『冥土返し』^{ヘブンキャンセラー}が唾然としてるけど、知らない、見えない。

「大丈夫か？当麻。」

「え、えーっと・・・」

当の当麻は（なんかだじゃれっぽい）記憶喪失の為俺の事がわからないからであろうか、なんか返す言葉に困ってる。

「おっと、そう言えば記憶喪失だったんだっけ？　しゃあねえな、それじゃあ自己紹介から始めっか。」

ここから、物語は始まる。

「瀬野宗也だ。ちよいと自然治癒力が強すぎる以外は普通の人間。これからよろしくなっ！」

『とある無能の集積強撃』《heap break》
『開始』

第十話 『禁書目録』（後書き）

はい、これにてプロローグ終了です！

ちなみに出てきた術式『聖使徒イアコフの福音』はオリジナルです。

イメージとしては、高速かめはめ波と太陽拳を合わせた感じ、思
つていてください。

・・・これで、今年の更新は終了です。

いやー書くのに切羽つまつたりもしたね、うん。

実は第一話書いてる途中に「もっとチートにしてもよかったんだじ
ゃね？」と思ったのは秘密。

それでは、よいお年を！

番外編 『お正月の騒動』（前書き）

はい、区切りがついたので番外編です。

まあ、原作と合わせれば違和感満載だけどね。

それは、ご都合主義ということ。

・・・それにしても、予約って便利。

番外編 『お正月の騒動』

「・・・ん？」

ある朝。

上条当麻はお腹の上に何かの重みを感じ、目を覚ました。

「・・・何やってんのインデックス。」

当麻の上に乗っかっている物。

それはほかでもない上条家の居候、インデックスであった。

「とっ、とうまっ！今日は何日かわかるっ！？」

インデックスは目をキラキラ輝かせながら当麻に訊く。

「何日って・・・昨日紅白が入ってたから1月1日だろ。」

「ぐっ・・・じゃあ1月1日は何て呼ばれるか知ってるっ!？」

当麻の冷静な返答にインデックスは一瞬身を引いたものの、気を持ち直し再び当麻へ訊く。

「うん？そりゃあ年の始めだし・・・元旦とか正月とかだろ。」

「むぐぐっ・・・じゃ、じゃあお正月には何を食べるかわかるっ!？」

未だ冷静な当麻に再び身を引くが、気合いで気を持ち直しまだまた当麻に訊く。

「それはやっぱり・・・おせち料理だな。」

当麻がそう言うと、インデックスは頭をものすごい勢いで縦にぶんと振る。

「まさか・・・おせち料理が食べたい、なんて言わないよなインデックス？」

「まっ、まさか、私はおせちは食べたくなんてないよ？ だけど・・・その・・・おせちをお腹の中に収めたいだけっ！！」

「それ世間一般では食べるっていうんだぜインデックス。」

そして当麻はハァとため息を吐くと、インデックスに諭すように話し始める。

「あのなーインデックス。俺だっておせち食べたいよ、うん。けど世の中っていつか上条さんはそんなこと許されないの。なんてかわかる？」

「お金がないから・・・」

「そうだよ。だからそんなわがまま言っちゃあいけません。」

・・・なんだか娘を諭している父に見えるのは気のせいだろうか。

「でっ、でもそれは当麻がコツコツと貯金しておけばっ！」

「お前にどんだけ食費かかっていると思っているんだぁ！こちとら貯金する暇もねえわ！」

はあ、不幸だ。と当麻はお決まりのセリフをため息交じりに呟く。

そして数秒後、何かに気付いたようで当麻はがばっと立ち上がった。

「そうだっ！あいつがいるじゃないかっ！」

「あいつ？」

インデックスは当麻の言っていることがわからず小首をかしげる。

「おいインデックス。俺等の隣の部屋には誰がいるかわかるか？」

「だれかとそうや・・・あっ！そうやがいるっ！」

「その通りだインデックスっ！俺等の隣の部屋には同居人もいず地

味に金持ち？な大親友瀬野宗也がいるんだよっ！！」

さて、あれを地味な金持ちと言っていいのだろうか。

その話は後日語ることにしよう。

「じゃあつまりそうやの所に行っておせちを分けてもらえばいいんだねっ！！」

「そういうことだっ！よしじゃあ早速準備して行こうっ！！善は急げだ！」

そして二人はいそいそと宗也の所へ行くための準備を始めた。

この時、俺は何故宗也の所へ逝ってしまったんだろう・・・

過去へ遡れるのならこの俺に忠告してあげたいぜ・・・

と後の当麻は語る。

ちなみに、逝くのは字は間違っていない。

「うん？なんだか騒がしいな。」

宗也の部屋の目の前で、いざ扉を開けようと思っていた当麻の耳に
なんだか騒がしい音が聞こえ、そう呟いた。

「きっと友達か誰か呼んで盛りあがっているんだよっ！」

「そうだなっ！よし、じゃあ俺達も混ぜるとするかっ！」

そして当麻は扉を開ける――――

中は酷く惨い状態だった。

部屋の中で誰か一人（赤髪の人なんて一人しか知らない・・・）倒れていて、その口からは赤い物体が流れ出ている。

そして何故か空気も薄く、ほのかにつんとくる匂いが部屋には充満していた。

この場の雰囲気を一言で表すとしたら、それはまさに死屍累々。

「なっ、なんだよこれっ・・・」

堪らず当麻は呟く。

「うつっ・・・」

そして足元から苦しそうな声が当麻の耳に聞こえた。

そこに倒れていたのは、魔術師の神裂火織であった。

「神裂っ！！」

「・・・うつっ、上条当麻ですかっ・・・がはっ！」

火織が赤いものを吐きだす。

だがそれは、人の血液ではなかった。

「わ、悪いことはいいません・・・早く・・・逃げ・・・がくつ」

「神裂いーーーー!!」

途中で事切れたように、火織は気絶した。

「い、一体だれがっ!」

まあ、この部屋に住んでいる人しかいないのだが。

「と、とうまつ!」

インデックスが部屋の中を指さす。

そこにはーーーーー

エプロンと三角巾を着け、包丁を手に持っている瀬野宗也がいた。

「きやあああああつ！！！」

「おわあああああつ！！！」

「・・・なんだよ人の姿見て。いきなり叫ぶとか失礼だぞ。」

堪らず当麻とインデックスは呟く。

「きやあああああつ！！！」

「お、おいインデックスウ！！！」

かなりショックっていうか怖かったのか、インデックスはそのまま宗也の部屋を出て、どこかに走り去って行った。

「・・・つたく、なんだよ人の姿見て走り出して。そんなに俺の姿がおかしいとでもいうのか？」

「うん。はたから見れば連続殺人犯だぞお前。・・・ところでこの二人はどうしたんだよ。」

当麻は中で倒れている赤毛の神父と足元に倒れている火織を指さしながら言う。

「ああ・・・ま、それはきちんと話すからよ、とりあえず上がれよ。そこじゃあ寒いだろう？」

「・・・ああ、寒いんだが・・・。」

何故か当麻は上がる気になれなかった。

その理由は簡単、当麻の鍛えられた第六感がこう告げているからだ。

入ったらお前も死ぬ、と。

「・・・どうした？上がらないのか？」

「・・・気のせいだろ。うんそうだ。そうに違いない。そうだと信じたい。」

当麻は無理やり第六感を頭の中から除外し、宗也の部屋の中へ入って行った。

「・・・で、何で倒れていたんだ？」

「ああ、俺特製のおせちを食べたらああなったんだ。なんでだ？俺別に作り方間違ったわけじゃないぞ？・・・ああそうだ、当麻も一緒にとんだ？作り過ぎて困ってたんだよ。」

「・・・え」

その後、上条当麻の姿を見た者は、宗也以外いない・・・

第十一話 『食い倒れ』（前書き）

あけましておめでとございます！

これから私の小説を見ていただける人達に注意書きというか・・・
まあ。

私は原作はもちろん見たことがあります。

ですが、原作の小説が紛失いたしました。（全部だよ。嘘じゃない
よ本当だよ。）

なので、細かいところはアニメ沿いになると思いますので、ご理解
のほどを。

それでは、長くなりましたが、第十一話です。

うん、早速アニメ展開だお。

第十一話 『食い倒れ』

八月一日。

あの禁書目録事件（勝手に宗也が名付けた）から二日経過し、上条当麻もめでたく退院し。

物語は日常へと戻りつつあった。

「・・・暑い。」

「・・・そんなこと言わなくてもわかってるぜよ宗也。」

「でもそつやん的には言わないと駄目な感じなんやる？」

「おいブルー野郎。そつやんってなんだ。俺のあだ名か？・・・だつたらもつと違う奴にしろ。ぶつちゃ言いづらいだろ。」

瀬野宗也は今日、あまりにも暇、ということで土御門元春と青髪ピアス（宗也&当麻・当麻談。本名は誰かのみが知っている）を連

れ、街を暇つぶしに歩いていた。

「・・・ブルー野郎ってなんやそうやん。逆にそっちの方がいいづらそうやん。」

「そうやんそうやんうるせえな！ほら！お前のしゃべり方だと普通にそうやんが会話の中に入るんだよ！名前を呼ばれたのかも紛らわしいからやめろや青髪！」

それにしても暑い。

宗也と青髪は二人で話しているが、その額からは汗が着々とにじり出ていた。

「とっ、とりあえずどこか店の中に入らないかにゃー？暑くて道端で倒れて信じまいそうだぜよ。」

「そうすつか。それじゃあ何処行く・・・っっておんやあ？」

某難見沢の刑事さんよろしく宗也は何かに気付いた声を出しながら前を指さす。

「?どうした宗也ーーーーってあれは・・・」

そこには、インデックスと一緒に歩いている当麻がいた。

しかし、問題はそこではない。

問題は――

「なっ、かみゃんが謎のコスプレ少女と一緒に歩いてるでっ! うっひょーっ!」

そう、はたから見ればインデックスは、シスターのコスプレをして歩いている少女にしか見えない。

当然、傍にいる当麻がそのコスプレを少女に強いた、という完結にいたる場合も無きにしも非ず。

「・・・何やってんだ当麻。いつもは近くにいたからわからなかったが、痛い。実に痛い光景だ。」

「なんかアイスの看板向いて何かやってるぜよ。」

「おもしろそうだから言ってみようや!」

「いやお前の目的それじゃない気がするんだが青髪。」

そして宗也率いる三人は、当麻の方へと歩いていく。

「おーっす当麻。元気?」

宗也の声で宗也たちの存在に気付いたようで、くるっと身体の向きを返る。

「なかなか素敵交渉中なんやけどなーかみゃん。」

「ちなみにその子誰ぜよ?」

「……………っは？」

元春と青髪はインデックスの存在を知らないため、当麻へとインデックスの事を訊く。

しかしそんなことよりも当麻は記憶を失っている為、宗也以外の存在を三人の中では知らない。

反困惑状態に陥っていた。

「どした？ぼけーっとして。暑さにやられて記憶でもとんどんのかいな？」

「……………んげ。」

青髪が当麻へと言う。

「……地味に的を得ているのがすごい。」

「冗談やがなー！記憶喪失なんて、不思議系電波少女の特権やでーっ！」

「で？実際誰ぜよそのちっこいの。」

「クネクネすんなきもい。」

青髪がすごくクネクネしながら言っていたので、宗也は頭へ拳骨を一発。

そして当麻は答えられないのか、答え方がわからないのか、まだ沈黙している。

「あ、もしかして女装少年？女の子にしてはぺったんこすぎるしー！」

ピキッとインデックスの額に怒りマークが浮かぶ。

「それ俺も思ってたんだよ初対面から。見た目的には14くらいなんだけどなあー……うん、残念。」

宗也の言葉でインデックスの怒りマークが格段に増える。

「お、おいお前らっ！言っていることと悪いことがっ！いくら幼児体型だからってー」

とどめに当麻の一撃。

インデックスは羞恥ではなく憤怒で赤く染まった。

「……とうま。」

「ぎ、ぎくう！」

インデックスの声が心なしか（まあ当たり前）怒って聞こえ、当麻はギギギと機械的な動きでインデックスの方へと振り返る。

「私はイギリス政教に属する修道女です。悔いがあるなら、今のうちに訊いてあげてもいいんだよー」

なぜかその姿は光り輝いており、まるで本当の修道女（いや嘘じゃないよ。）のようだった。

このあと、当麻がインデックスの機嫌をとるために、アイス奢る羽目になった。

心から当麻には、ご愁傷様。

とある無能の集積強撃《h e a p b r e a k》

第十一話 『食い倒れ』

結局、アイスの店は開いておらず、当麻はハンバーガーショップにて、もろもろを奢る羽目になった。

「悪いにゃーかみゃん！」

「ゴチになりまー！」

「この借りはいつか返したいと思う。返すつもりは毛頭ないけどー
！」

「・・・結局全部俺の奢りかよ・・・はあ、不幸だ。」

上から元春、青髪、宗也である。

何故か当麻はこの三人も奢る羽目になったのだ。

再び心から、ご愁傷様。

「とうまーっ！こっちだよーっ！」

「はいはい。ホレ行くぞ宗也。」

「ちよつ、俺もう一個ハンバーガー頼みてえんだけど！」

先に進んでいたインデックスの声で当麻は我に返り、ハンバーガーを追加注文しようとしていた宗也の襟を掴み、席へと向かった。

「おお、良く開いてたな席・・・っておい。」

「・・・シスターの次は巫女さんね。どうなってんだこの世界。」

そこには、巫女の恰好をして机に平れ伏している女性がいた。

（あ．．．あやしい．．．）

（おいおい、原作よりもカオスじゃねえか姫神秋沙。ぶっちゃけ関わりたくないんだが。）

上から当麻、宗也の心情。

しかし宗也の願いとはうらはらに、席はここしか開いていなかった。

「．．．うつ。」

「ど、どうかしたんですか．．．」

秋沙が低く唸ったので、当麻が軽く話しかける。

「くっ．．．食い倒れた。」

「しらねえよ。」

思わず口に宗也は出してしまったようで、慌てて口をふさがが時すでに遅し。

その場にきまづい雰囲気 flowed。

そして――

「「「最初はグー！じゃんけんぽん！」「」「」

こうなった。

ちなみに結果は、

元春がグー。

青髪がグー。

宗也がチヨキ。

当麻がチヨキ。

二人の負け。そして、最終決戦。

「さあいしよはあぐう！！！」

宗也が力を込めて言う。

「じゃあけんーーーー」

当麻も力を込めーーーー

「「ほおい！！」」

宗也、チヨキ。

当麻――――

グー。宗也の負けであつた。

「よっしやあああ！」

「ぬおおおお！！神よ何故私を見捨てたのですかあああ！！！」

なんか魔術名が出てきたけど、気にしない。

「あ、あのーああもうタメでいいや。食い倒れたってなんだ？」

なんか罰ゲームみたいだが、宗也が秋沙へとそう訊く。

最初は敬語で話そうとしたみたいだが、あきらめタメ口にて。

「・・・一個百円のハンバーガー。お徳用のクーポンがたくさんあったからーとりあえず30個ほど頼んでみたリ。」

「・・・そりゃあ食い倒れるわな。アホか。」

宗也の一言が胸へ突き刺さったのか、秋沙が余計しゅんと沈んだ、ように見えた。

「あつ、す、すまん！つい！-！」

「・・・やけ食い。」

「・・・は？」

再び淡々と秋沙は話し始める。

「帰りの電車賃。 600円。 全財産。 500円……。」

「あ、終わったな。 どんまい。 いい働き手なら紹介するぜ。」

「だからやけ食い。」

宗也はハァとため息をつく。

「ぶっちゃけ、誰かに借りれば？ そんな恰好すれば秋葉原のオタクらへんなら写真と引き換えに貸してくれるぞたぶん。」

「……おおー。 それはいい考え。」

そう言って秋沙は顔を挙げる。

「……何故こっちを見る。 ほら、横にやさしいお兄さんがいるぞ
」。

宗也がそう言つと、秋沙は目線を変えて当麻の方を見る。

「１００円。無理？」

「ああ？無理。貸せないものは貸せない。」

「・・・チツ。たがが１００円も貸せないなんて。」

「たがが１００円を持っていねえのはどこの馬鹿だよ！」

知らない人に、当麻はまさかの素の返事で返してしまう。

「おつ、こんな美人の巫女さんを前に素の返事。成長したにゃーかみゃん！」

「・・・美人？」

何故そこに反応する。

そして再び当麻の方を見て、

「美人に免じてあと1000円。」

「うつせえ黙れ！こちら約4名に集られまくって一切余裕がねえんだよ！」

当麻がことわると、今度は宗也の方へ。

「1000円。」

「・・・90円なら貸してやってもいい。」

「ならかして。」

「やってもいい、だ。貸すとは言っていない。故に貸さない。」

「・・・チツ。」

そして次は元春の方を見て、

「1000円。」

「にゃあああ！こっち来たぜよ！」

そして最後に青髪。

「100円。」

「ほああ！なんでこっちにも！」

「さっき写真とられた。」

「有料かいな！」

さっき写真をこそこそ取ったのが裏目にでた青髪。

「ふっ、ふーん。この町の巫女さんは顔も売るんだ？」

「・・・私。巫女さんではない。」

「はあ？どっからどう見たって完璧な巫女さんだろ。」

インデックスの問いを否定するが、当麻の言つとおり。どこからどう見ても巫女。

「私……魔法使い。」

この出会いから、物語は始まった。

とある少女の吸血殺し《deep blood》、開始。

第十一話 『食い倒れ』（後書き）

青髪の口調が一番むずい。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6040y/>

とある無能の集積強撃《heap break》

2012年1月8日20時48分発行